
フレールの竜

南条武都

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

フレールの竜

【コード】

N0958D

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

赤竜は思う。選択の時は訪れたのだ、と。伝説に謳われる赤竜を軸に描かれる過去と現在。長い時の中ではぐくまれた思いが今、解き放たれる……

森の番人

その森では、木々が葉を茂らせた枝を重くもたげ、地面は草や苔に厚く覆われていた。

獣道しか見当たらないこの未開の地を、男が二人、歩いていく。彼らは鎧に身を包み、剣で草を切り払い、先へ進んでいた。

森は静かだった。天をつく木々が空を埋め尽くし、小鳥が軽やかな歌を紡ぐ美しい森を、男達は道を急ぐ。

男達は、この森の西側にある村からやってきた。

古くより禁忌とされてきたこの森に入ってほしいと彼らに依頼してきたのは、ほかならぬ、森の番人を勤める村長だった。

『あなた方の腕を見込んで、頼み事をしたい』

食堂で昼食をとっていたところへやってきた村長は、そう切り出した。最初は何の気なく聞いていた男達は、しかし村長の話が進むにつれて、身を乗り出していった。

村長の話はこうだ。

村の東には、大昔から、大陸のほとんどを覆っている広大な大森林がある。

この大森林に隣接した所に住む村の人々は、森の恵みに感謝と畏敬の念を捧げ、心ない人間の手でむやみに森を荒らされぬよう、村長が代々森の番人となってこの場所を守ってきた。

しかし、森の真の番人と認められているのは、これもまた人の記憶には残されていないほどの永い時を、森と共にすごしてきた赤竜だった。

『見上げるほど巨大で、燃え上がる炎のような膚はだの、美しい竜です。この村はずっと、あの赤竜を守護神とあがめて来ました。あの赤竜がいるからこそ、森は今ある姿を保つことができるのです』

『その赤竜を見つけてほしいっていうのは、どういう了見だ？』

男の一人が問うと、表情に畏敬の念を浮かべていた村長は、顔を曇らせた。

彼が言うには、赤竜が全くその姿を見せなくなってしまったのだそう。以前なら一週間に二、三度、村の上空を飛んでいたし、森の奥深くから地面を揺るがすような咆哮が聞こえたものだが、ここしばらく、その気配も無い。

赤竜に何か起きたのか。よそへ移動したのか。それとも、他に理由があるのか。

心のよりどころとして赤竜を慕っていた村人達は、かつてない事に日々不安を募らせていた。実際どういった事になっているのかを確認しようにも、村人達は赤竜の聖域たる森に足を踏み入れる事を恐れるし、森の中に生息する獣達と渡り合う技術もない。

この村に滞在して数日。男達はすでに、家畜を食い荒らす狼や、森に巢食う盗賊たちの退治などの依頼をこなして、その技量を示し、村人達の信頼を勝ち得ている。

それ故に村長は、村の一大事に関わるその問題を、彼らに託そうと決心したのだった。

男達に異議はなかった。

冒険者生活が長い彼らも、竜に出会う機会はなかなか無い。竜というのは、いつの時代も冒険者の憧れだ。これが竜退治なら少々手に余る仕事だが、様子を見に行くくらいなら、なんでもない。

彼らは村長との交渉がまとまると、早速準備をして、森に足を踏み入れた。

そして、今日で四日目だ。

これまでの道のりで、何度か獣に襲われたが、さほどの手間をとらずに撃退することが出来たので、男達は少々気を緩めつつあった。「……赤竜つてのは、珍しいな」

黙々と、道なき道をいく男達のうちの一人が、不意に口を開いた。もう一人の男が「ん？」顔を向けると、相手は軽く肩をすくめる。

「いや、竜っていうのはもともと数が少ないらしいんだが、その中でも赤竜は、数えるほどしか居ないそうだ」

「何でだ？」

「さあ、わけは知らないが。体が赤いと目立つから、その分敵に狙われやすいんじゃないか？」

「竜の敵なんか居るのかよ。あんな強くて、おっかない生き物に」
男は大きく張り出した木の枝を切り落とし、汗をぬぐう。相方はふ、と苦笑した。こちらも額に汗を浮かべている。

「あえて言うなら、人間じゃないか。赤竜の鱗で鎧を作ると、火に強い代物が出来るらしいから」

赤竜の数が少ないのは、そのあたりにも原因があるらしい、と男は言葉を継いだ。

それからしばらく、また黙って歩き続けた。

木々の枝に遮られていて分かり難いが、日がだいぶ傾いてきたらしい。徐々に気温が下がりがつつあるのが、火照った体には心地よい。木から飛び立った鳥の羽音が耳に響いた。そろそろ寝床の支度でもするのだろうか。

草刈りに飽きたのか、先ほど赤竜の話をした男が、また口を開いた。

「……そういやお前、『フレールの竜』って話、知ってるか？」

「いや。何だ、どどういう話？」

「おとぎ話だよ。確か、どこか北の国で伝わっていたかな。赤竜が出てくる珍しい話なんで、覚えてたんだ……」

おとぎ話と狼

「むかしむかし、あるところに、とても心のやさしい娘さんがいました。

娘さんにはおとうさんもおかあさんもおらず、ちいさな村のはずれに一人でくらししていました。娘さんをふびんにおもった村人たちはいつも娘さんを気にかけて、しんせつにしていました。

娘さんも村人たちのしんせつを心からかんしゃして、なにかたのみごとをされれば、よろこんで何でもしてあげました。

娘さんは心のやさしさと同じように、とてもきれいな娘さんだったので、むらびと達にたいへん愛されていたのです。

ある年のことでした。その年はあめがひとつぶもふらず、村のひとたちは水がなくなりたいへん困りました。

村人のひとりが言いました、「ああ、これはかみさまのぼつなのだろうか、このままあめがふらなければ、わたしたちは死んでしまおう」

これをきいた娘さんはいいました、「それではわたしが水をさがしてきましょう。わたしがみなさんに水をもつてきてあげます」

村人たちは「そんなあぶないことはおやめなさい」と娘さんをとめました。娘さんはききませんでした。

これまでお世話になったおれいに、娘さんはどうしても村人たちに水をもつてきてあげたかったです。

そして娘さんは、水をさがす旅にでたのでした。

娘さんは、何日も何日も、水をさがして歩き続けました。

あめがふらないのはどこも同じで、どこまでいっても水はみつきりません。娘さんはくつをはいていかなかったので、あしは血だらけです。水もたべものもないので、娘さんはいつもおなかがすいていま

す。

あしがいたくて、おなががすいて、娘さんはふらふらでした。娘さんはじぶんがどこにいるのか、なにをさがしているのかもわからなくなつて、ある日とうとう、みちばたにたおれてしまいました。

娘さんは目のまえがまっくらになつて、いたみもくうふくも、だんだんかんじなくなつてきました。

「わたしは、かみさまのもとへゆこうとしているのだけ。

ごめんなさい、むらのひとたち。わたしはみんなに、お水をもつていくことができませんでした」

娘さんがかなしみにくれて、そうつぶやいたとき、

「にんげんの娘よ、死んではならぬ」

娘さんにそうかたりかけるものがいました。娘さんがかおを上げると、そこにはおおきなおおきな竜がいました。

それはみあげるほどきよだいな竜でした。

体はまるでほのおのように、ゆうひのように真っ赤です。ひろげたはねは空をおおい、あつい太陽のひかりから娘さんをまもつてくれています。おおきなふといしつぽを、ぐるりとあしもとに巻いた竜は、娘さんを見おろして、言いました。

「にんげんの娘よ。そなたのおこない、わしがすべてみとどけた。

そなたはおのが身をかえりみず、ただ村人のためだけに水をさがしもとめていた。

その心のうつくしさのため、わしがそなたのねがいを叶えてやる」

そういつて竜は、竜のおおきなひとみからこぼれおちた涙をふくろにいれて、娘さんにあげました。

娘さんがそれをひとくちのむと、ふしぎなことに今までのつかれやくうふくが、うそのようにきえてしまいました。

それだけではありません。

娘さんがそれをもって村へもどると、涙はどれだけくんでもつき

ないみずつみとなりました。それからずっと、水にこまることになくなり、村人たちは娘さんにたいへんかんしゃしたのでした」

「……へえ。聞いた事ねえな、そんな話」

道を進みながら男が言うと、語っていた男は肩をすくめる。

「まあ、そうだろうな。今じゃ語り手もほとんど居ないらしいから。この話、なかなか面白いと思わないか？どの村が元になった話なのか、娘がその後どうなったのか……そもそも、題の『フレール』が何を指してるのか、物語からじゃ全く分からない。水不足になった村の事か、水を捜しにいった娘の名前か、あるいは……」

男はそこで口を閉ざした。前方の緑の中に動く影が見えたのだ。相方もそれに気づき、視線を交し合う。そして不意打ちを警戒して、一人は前方を、一人は周囲に注意を向け、お互い無言で剣を持ち直した。

かさつ。

落ち葉を踏むかすかな音が、耳に響く。

獣とおぼしき四つ足の、ゆったりとした足取りが近づいてくる。

急の襲撃を警戒して、男達が剣を構えた時。

茂みの中から滑り出すように、する、と白い狼が現れた。

「！」

男達は驚き、思わず息を飲んで後ずさった。

突然現れた狼は、緑の闇に慣れた目には眩しいほどの純白をまとっていた。

その毛皮には一点の穢れもなく、目は、宝石のように輝く青。

森への侵入者である彼らをその瞳に捉えても、狼は警戒や威嚇の唸りを発する事無く、彼らの前までやってきて、その場に座った。

そして、口を開く。

『貴方達は、何処へ向かっておりますか』

「なっ……」

「口が利けるのか!？」

よどみなく放たれた言葉に、男達は再度、驚嘆した。彼らはこれまで様々な場所へ行き、色々なものに出会ってきたけれど、言葉を発する動物というのは稀だ。

例え言葉を発することが出来たとしても、それは人間の幼児並みの語彙に限られていて、人間と会話を交わすことなど、到底叶わないのだ。

白い光をその身に帯びているかのような、美しい白狼は、わずかに首をかしげた。

『それが必要であるのならば。お答えを、貴方達は、この森の何処へ向かっておりますか』

その外見にあつた、澄んだ声が同じ問いを繰り返す。男の一人が、ごくくり、と唾を飲み込み、

「……りゅ……竜の、赤竜のところへ」

言葉を搾り出す。白狼は軽く尻尾を振った。

『何ゆえ、赤竜のところへ向かっておりますか』

「村が……その、この森の西に、村があるだろう？ 彼らが最近、赤竜の姿が見えないと心配してるんだ。だから俺達が様子を見にきたんだが」

恐る恐る用件を伝えると、白狼は頷くように鼻先を下げ、くるりと背を向けた。

『参られませ』

「え？」

『我が御主人様は、訪おもつものを拒みませぬ。参られませ、私が案内あないしましょう』

そして、白狼は奥に向かって歩き出す。男達は顔を見合わせ、同時に頷いてから、狼の後を追った。

赤き竜

白狼は、緑の海を泳ぐように滑らかな動きで、道をたどっていた。

人間が通れる道を選び、先へ先へと進み、進んでは立ち止まって、彼らが追いつくのを待つ。

その足元ではほとんど音がせず、あまりにも静かなものだから、時折本当にそこに狼がいるのか、と自分の目を疑ってしまうほどだ。白狼の導くまま、ほとんど夢うつつの状態で歩く男達が我に返ったのは、踏み出した足の下で、ばしゃん、と水がはじけたときだった。

見下ろすと、いつの間にか地面がじくじくと湿り気を帯び始めていた。視界を遮る枝を押し除ける。奥にいけばいくほど、地面がぬかるんでいくようだった。

「……近くに沼でもあるのか？」

「さあ……そんなものがあるとは、聞いてなかったが」

白狼は、ぬかるみの中で振り返って彼らを待っている。男達は再び足を動かして、濡れた地面を歩き始めた。

不思議な事に、先に進むほど、男達の靴には水気を帯びた泥が跳ねてこびりついていくのに、白狼の体には少しも汚れがつかなかった。

どれほど進んだのか、時の流れは分からなかった。土は湿り気を増し、時には大きな水たまりが道をふさぐため、よける事もままならなくなっていく。ぐっしょりと濡れた靴にうんざりしながら、白狼が潜り抜けた枝を払いのけた男達の目の前に、突然湖が広がった。さ、と冷たい風が頬をかすめ、涼やかな水の音が耳を打ち、火照った体が鎮まっていく。

だが、涼しさを感じると同時に、男達は息を飲んで体を硬直させた。ざわ、と腕に鳥肌が立つ。

赤竜が、そこにいた。

燃え盛る炎を思わせる膚に、そこに在るだけで他を圧する巨体。男達の気配を察していたのか、赤竜は長い首を持ち上げて、彼らをじっと見据えている。ゆったりと動かした太く長い尻尾が、水面を揺らして、ばしやりと音を立てた。

赤竜を中心として広がる湖。

空の青と、赤竜の赤い膚が湖に映りこんだその光景は、あまりにも目に鮮やかで、とても現実とは思われない光景だった。

「……フレールの竜……」

呆然とその言葉を呟いたのは、その竜が、先ほどのおとぎ話の赤竜を思い起こさせる威容だったからだ。

彼らが竜を目にしたのは初めてではないが、これほど大きく、そして静かに端座する竜には、出会ったことがない。

鱗に覆われた体は屈強で、こもりのように皮膜の張った羽根は広げたら、光を遮ってこの辺りを闇に包み込んでしまつたろう。

木の幹ほどもある太いかき爪を有する巨体は威圧的だ。しかし、今にもその口から業火を吐き出しそうなほど迫力があるというのに、不思議と静謐な雰囲気漂わせている。

赤竜は闖入者に動じる様子もなく、ゆっくりと首を足の間に下ろした。ぶふう、と鼻息をもらすと、それが水面を揺らす。

白狼が頭と尻尾を下げ、湖の中へ入っていった。小さな波紋をいくつも作りながら、赤竜の元へ歩み寄った白狼は、何かを赤竜に告げた。それを聞いていた赤竜は一度、目を閉じる。

白狼はそこで己の役割は終わったと言うように、するする池を渡り、森の奥へと姿を消した。

『西の村の遣いだそうだな』

ざらざらとして聞き取りにくくはあったが、赤竜は腹の底に響くような低い声を発した。

『ここまで来るのに、随分骨を折つたであろう。ここに危険は無い。しばし休んでいくと良い』

「……は……」

思いがけず労わりの言葉をかけられ、男達は一瞬呆けた。これほど人間らしい言葉を、恐ろしげな風貌の赤竜からかけられるなどと誰が想像するだろう。

何の冗談かと相手を見返したが、赤竜は敵対する様子も無く、穏やかに彼らを見下ろしている。

「あつ、いや、そういう訳にはいかねえよ。あんたが無事ならそれを早く村人に伝えて、安心させてやらないとな」

慌てて手を振り、じりじりと後ずさった。いくらなんでも、面と向かって語り合いたい相手ではない。怖気づいて、用は済んだとばかりに、さっさと帰ろうとした男達だったが、

「……いや。わしの命はそう長くない。村人達の心配も、杞憂ではなからうよ」

「!？」

深みのある声が淡々と告げた事に、思わず足が止まった。一瞬恐れを忘れ、まじまじと赤竜を見上げる。端座する赤竜の威圧的な外観に、これといった変調は見られない。

しかし、穏やかに微笑んで彼らを見下ろす赤竜には、悟りきった雰囲気が漂っているようにも感じられる。

「あ、あんた、病気かなんかなのか？」

男達は再び赤竜に向き直り、半信半疑でそう尋ねた。これほど生命力にあふれた生き物を、殺す病気などあるのだろうか。

赤竜は笑みをますます深くして、

「そついえば先ほど、懐かしい名が聞こえたな。……人間達の間では、フレールの竜がおとぎ話になっているそうだな？」

急に違う話題を切り出してきた。構えた男が思わず肩を落とす脇で、話をしていた方の男が、驚きに目を見張る。

「あ、あれは実話なのか？ あんた、あの竜を知ってるのか」

「長き時を生きる我らにとっても、余程昔の話だ。人間達にはとうに忘れ去られたものと思っていたが……」

そこで、赤竜はふうつと息を吐き出した。

『人間は不思議なものだな。同族と意味も無く殺し合い、残虐の限りを尽くすかと思えば、己のためにもならぬ事に命を投げ出す。種族の違うわしを気遣って、様子を見に来るような輩もおる』

男達を見下ろす赤竜の瞳は、水の照り返しを受けてきらきらと輝いている。男達はなぜか恥ずかしくなった。赤竜の言葉があまりにも真つ直ぐ、なんのてらいも無く降ってきたからかもしれない。

赤竜は男達が困ったように顔を合わせる姿に笑い声をもらし、

『先ほどの話だがな。人間達の間で伝わっているものをこぼれ聞いたが、語られておらぬ事があるようだな』

「え？」

何のことかと、男は首をかしげて、訝しげに相手を見上げる。赤竜は息を漏らして、体を動かした。ずぞり、と巨大な尻尾が動き、足が胴体を持ち上げる。

『村を救った娘は、その村にとどまらず、再び赤竜のもとへ戻った。そして、赤竜の神子みことなったのだ』

赤竜が立ち上がり、これまでその巨体に遮られていた向こう側、木々の影が落ちて薄い闇に覆われていたその場所から、人間の女が現れた。

まさか人がいるとは思わなかった男達は驚きに息を飲み、同時にその女に見とれてしまった。

女は、色がすべて抜け落ちたかのように、全身純白だった。

すんなりと伸びた手足や、身にまとった服の合間からのぞく胸元が、光を受けて細かな輝きを放つ。腰まである長い髪は白銀、瞳は透き通るような青。その目は、不思議なことにあの白狼のそれと同じだった。

「……ようこそ、いらっしやいました」

ゆるゆると穏やかな言葉を発したその女は、裸足のまま池に足を踏み入れ、赤竜の傍まで歩み寄る。

そして、いたわるように赤竜のごつごつした膚に触れ、ふわりと

フレールの竜

微笑んだ。

白き女

湿った薪を燃料に、しゅうしゅうと水蒸気を上げながら、炎は燃える。

高い場所へと立ち上っていく煙は、茂る枝に拡散されて、空の闇に触れるより先に消えてしまう。圧倒的な存在感を持つ赤竜を目の前にしながら、しかし森は変わらず静かだった。あるいは、赤竜が居るからこそ、この森はこれほどの静寂を保てるのかもしれない。

『これから戻っては、村にたどり着く前に夜になる。今宵はここで、夜を明かすが良い』

赤竜は硬直する男達に、相変わらず柔らかな言葉をかけた。そして竜の神子だという女を優しく見下ろしてから、体を丸めて寝に入った。

赤竜が眠りにつくと、僅かながら、周りの温度が上がるように思われた。おそらく眠る事で、竜の体温が上がるのだろう。その証拠に、水の蒸発する音が響いて、周囲にぼんやりと霧が生まれている。横になった赤竜のそばで、女は男達に話しかけてきた。

「人間の方とお会いするのは、本当に久しいことです。どうか、外の世界のお話を聞かせてくださりませぬか」

ふわり、と穏やかな微笑を向けられて、断るすべは無い。男達は事態についていけず困惑していたが、竜の勧めと美女の微笑みに従うことにして、野宿の準備をした。

とはいえ、池のまわりは水びたしで、寝場所どころか、煮炊きのための焚き火を起こす事すら難しい。

どうしたものかと思案しているところで、察した女が、自分が寝起きしている乾いた地面へ彼らを案内し、更に竜を起こした。

「お休みのところ申し訳ありませぬ、御主人様。この方々のために、火を起こしては頂けませぬか」

『……ふむ、そうだな。それは気がつかなんだ。失礼したな、人間

よ

赤竜は男達のために小さな、しかしそれでも思わずたじろいでしまふほどの炎を吐いて焚き火を作り、また厚いまぶたを閉じた。

そのまま深い眠りに落ちていったようで、時が過ぎ、男達がなんとか落ち着きを取り戻した頃には、赤竜は太い寝息をもらすようになっていた。

「しかし……、その、なんだ。あんた本当に、あのおとぎ話に出てくる娘さん……なのか？」

竜の威容から恐る恐る目を離し、男の一人がそう尋ねた。手にしている干し肉をもてあますように、右手と左手に持ち替える。

男達が語る話をにこにここと聞いている女は、一見してそれほど変わったところはなかった。

確かに彼女は並外れた美しさを備えていたが、例えばエルフのように、人間のものとはとても思えないような侵しがたい美貌、というわけでもない。

人間として、ありうる範囲での美貌、とでもいえばよいのだろうか。

親しみ深ささえ感じさせる優しい表情のためか、おとぎ話として語られるほど昔に生きていた人間とも考えられないのだ。

女はほろほろ、と笑い声をこぼした。

「ええ、そうです。しばらくぶりにそのお話をお聞きすることが出来て、大変嬉しゅうございます」

本当に大昔の人間なのか、それとも竜と共に生きてきた為か、女の言葉遣いはどことなく古めかしい響きを帯びている。

「私の生まれた村は、既に無くなってしまったそうですが……当時
の事は、今もはっきり覚えております」

「じゃあ、あんたの村が水不足で大変な事になったつても、あんたが水を探して旅に出たっていうのも？」

「ええ」

そこで女はなぜか、影を帯びた微笑を見せた。

「？」

男は、何か言いたげなその笑みが心にひっかかった。が、これまでまっすぐ彼らを見つめていた女は、そこですっと視線をはずし、「……さ、もっとお話をお聞かせくださいな。私は今の世界を知りたいのです」

目を細めて言った。それは、更なる疑問を口にしようとするのを拒むような、静かな拒否だった。

何か、事情があるのだろうか。

男達は互いに視線を合わせると、これ以上の質問はすまいと頷きあった。そして彼女の望むまま、この森の外に広がる世界の事を再び語り始めたのだった。

決意

『良いのか、神子よ』

頭上から降ってきた声に見上げると、森の木々によって切り取られた青い空を背後に、赤い竜がこちらを見下ろしていた。

その次の日、空は晴れ渡り、爽やかな涼風が木々の合間をすり抜けていく、心地よい日和だった。

きらきらと輝く朝の陽光の中で目覚めた人間達は、持参してきたものに、森の滋味を加えた朝食を終えても、未だ自分達が夢の中にいるのでは、と疑っているように、ぼんやりした眼差しで辺りを見回している。

神子はそんな彼らを、なんともいえず懐かしい思いで見つめていた。

久方ぶりに出会った人間が語る外の世界は、神子がいた頃とは随分、様変わりしたようだ。

聞く話聞く話、全てが目新しく、しばらくぶりに戻った人間の体の重さや感覚の鈍さを忘れて、熱心に聞き入ってしまった。

(短い間に、人間はなんて変わるものなのだろう)

そう思ったが、しかしそれは自分が赤竜という、気が遠くなるほど長い時を生きる存在と共に居るためだろう、とも思う。

あの恐ろしい早魃の日々も、全てを破壊し尽くした大戦も、遙か昔の事なのだという事をいまさら実感して、神子は懐郷の念を覚え

た。

神子として赤竜のそばに侍るようになってから、一体どれだけの時が過ぎたのか、神子にはもう分からなかった。今話している人間の言葉が、正しいのかどうかさえ、あやふやだ。

赤竜と共に過ごしてきた日々は、まるで宝石のように輝かしく、美しく、楽しいものだった。

だが、どれだけ長い時を過ぎても、神子は己がまだ人間であった時生まれ育ったあの村を、今でも愛していた。

あの村が、楽園だったとは言わない。

両親を失ってからというものの、楽しい事ばかりではなく、時に一人で血の涙を流すこともあった。

けれども神子にとってあの村は故郷であり、人間であった時の全世界であり、原点でもあった。

そこに生きる人間達は、愚かであったかもしれないけれど、愛すべき人々だった。

逃れ得ない戦いで傷つき、懸命の看護も及ばず、腕の中で冷たくなっていった人間の重さを、その悲しみと苦しみを、神子はまざまざと思い出すことが出来る。

それはどれだけ時が過ぎようとも、決して忘れることのない、大切な思いだった。

神子が思いに耽っている間に、人間達は帰り支度を終えたようだった。地面に伏して、体に木漏れ日を受ける赤竜を見て、嘆息をもらす。

「なあ、あんた本当に死んじゃうのか？　なんか勘違いだったり、しねえのか」

どうにも信じがたい、という感情が表情からも言葉からもにじみ出ている。

『どれだけ耄碌せうろくしようとも、己の死期くらいは分かる。村人達にはよく事説いてほしい、わしの死はこの森の終わりではなく、またその死を悼む必要も無いのだと』

赤竜はうろこに覆われた硬質な顔にぎしり、と音を立てて微笑みを浮かべる。

『死は全てのものに等しく訪れる、必然の恩寵だ。悲しむ事はない。穏やかな赤竜の言葉に、神子は胸をつかれて俯いた。』

そう、人間のように儂くはないけれど、この赤竜の命とて、今や終わりが見えているのだ。

昔、己の力が足りずに多くの人々を救えなかった時と同じように、赤竜の命を永らえる事など、神子には出来ない。ただそばにいて、赤竜の命が尽きていく様を見守ることしか出来ない。

それが、ひたすらに悲しい。無力感に息を吐き出して、神子は赤竜の膚に手を当てた。

手のひらから、赤竜の体内で燃える炎の熱が伝わってくる。それはかつて出会ったときとは比べ物にならないほど弱い。

「でも、じゃあ、村人達はともかく……その人はどうなるんだ？」

思いもかけない言葉に、神子は驚いて彼を見た。なぜここで、自分のことが問題になるのだろう。赤竜は目を細める。

『どう、とは？』

「だから……。よく知らないけど、あんたとその人、ずっと長いと一緒に暮らしてきたんだろ？ でもあんたが死んだら、その人はここで一人ぼっちになるじゃないか。それで、自分が死ぬ事を悲しむな、なんて無理じゃないのか？」

神子は目を見開いた。赤竜の死期を知ってから、胸に淀んでいた不安が急に明確な形となって、喉にせりあがってくる。そうだ、赤竜が死んだら、その後は。

赤竜はこちらをちらりと見やつた後、

『ではどうせよというのだ、人間よ？』

確かにわしが死ねば、神子は森に一人残される事になる。これから先、言葉を交わす者無く長き時を過ごしてゆかねばならぬかもしれぬ。あるいは、森に生きる獣に食い殺されるかもしれぬ。

なれば、どうせよと？』

その言葉を受けて、もう一人の人間が、考え深い表情で赤竜を見上げる。

「……そりゃ、一番いいのは、その人を人間の世界に戻すことじゃねえのか。そりゃさ、今の世界はその人にとつちゃ、全く知らないところで、暮らしてくのもそう簡単な事じゃねえかもしれないけど、その人が帰るべきなのは、やっぱり俺達の世界なんじゃねえかと、

俺は思うよ。

だからもし、あんたが行きたいっていうなら、俺達が森の外へ連れて行ってやるよ？

そこから先は……そうだな、村の人達は赤竜をあがめてるんだ。竜の神子だっていうなら、喜んであんたの世話をしてくれると思うし、外の世界がもつと見たいなら、俺達が……あんたが耐えられるなら、だけどよ、俺達の旅についてきてもいいんだぜ」

「そ、れは……」

己の胸のうちを透かすような言葉に、神子は戸惑った。

確かに、赤竜が居なくなっただ後のことは、人間の言う通りかもしれない。

この森の生き物は皆、赤竜や神子を慕ってくれてはいるが、赤竜が神子に、神子が赤竜に望むような関係を築けるものは居ない。もし一人になったら、と考えると、想像を絶する孤独に寒気がした。

赤竜は神子の逡巡を見て取ったようだった。顔を持ち上げると、鼻先でそつと神子の体を押す。

「御主人様？」

「神子よ。彼らを森の外れまで、送ってゆきなさい」

穏やかで優しい声音だが、それはやんわりとした断絶だった。

人間達の前に押し出された神子は、人間達と落ちつかかなげに視線を交わした。困惑しながら、それでも命ぜられた通り、人間達とともに森の中へと進みだす。

このまま、人間達と共に森を出て行け、という事だろうか。人間の中に身を置いて、彼らと共に生きよという事だろうか？

だが、これほど呆気ない永劫の別れがあるうか、赤竜が自分を引き止めるような言葉を口にしたりはしないかと、不安げに後ろを振り返った時。

どきり、と大きく心臓が動いた。

赤竜は、じつと神子を見つめていた。意外と豊かに表情が変わるその顔には、今は悲しみも何もなく、ただ整然とした様子で、神子

を見送っていた。

しかし、青い空を映し出した水に囲まれ、たった一匹で座した赤竜の姿は、見上げるほどの巨体であるにも関わらず、まるで世界の全てに取り残されたかのように、心細げにも見える。

それはもしかしたら、己が望む故の幻だったのかもしれない。

けれども神子は、何も語らない赤竜の表情に、哀惜を見た気がした。狂おしいほどの孤独を見た気がした。

神子は、行かないでくれと叫ぶ声が体の中に響き、駆け巡るのを聞いた。

そして、その声を聞いた時、己の迷いが跡形もなく焼き尽くされる音も、彼女は聞いたのだった。

フレールの竜

いつものように、獣の足で音も立てずに湖へ滑り込むと、体を丸くしていた赤竜が顔を上げた。その顔は先ほどここを離れた時と同じように無表情だった。

「戻ったか、神子よ」

「はい。戻りました」

何気ない会話を交わしながら、白狼の神子は、赤竜のもとへ歩み寄った。湖の水面をまろびて輝く光が目に入ったのか、赤竜はすうと目を細める。

「良いのか、神子よ。このままあの人間達を帰して」

ついで告げられた声は、穏やかではあったものの、慎重な響きを帯びていた。まるで、答えを聞くことを恐れているかのように。

神子は目を細めて微笑んだ。

「良いのです、御主人様。私は、貴方様のお側にお仕えるものです」

「わしはいずれ死ぬ」

神子の笑みを凍りつかせようとするかのように、赤竜の声は鋭かった。

「わしとそなたは、もはや分かつ事も出来ぬほど魂が結びつき、絡み合ってしまった。」

わしは己の寿命が故、そう遠くない未来に朽ち果てるだろう。それは、そなたの命も尽きることを意味している」

見上げるこちらを、芯まで焼き尽くすような厳しい眼差しで見下ろして、赤竜は言う。

「だが、神子よ。もしそなたが人間である事を選ぶというのなら、わしは今からでもそなたを人間に戻し、あの人間達に託そう」

「御主人様……」

淡々と紡がれる言葉は突き放す冷たさを秘めながら、しかし同時

に深い思いやりが感じられた。

『選ぶのであれば今だ。人間に戻り、人間の世界で生きていく事が出来る機会は今しかない。』

選べ、神子よ。さすれば、わしは神子の望みを叶えてやるう』

今ここで、人間に戻る事を選ばなければ、己は赤竜と共に死ぬ。

あの懐かしい人間の世界に戻る事も、この森でただ一人生きていく事も出来ずに。

だが、神子は、再び微笑んだ。最早、迷いは無い。

「いいえ、御主人様。これでよいのです。確かに、人間の世界に未練がないと言え、それはいつわりになります。けれども、私は貴方様と共に居たいのです。この命が尽きるまで、ずっと」

『……何ゆえ？』

赤竜が身じろぎする。声に表情が浮かび、困惑の色を帯びた。

神子がそつと顔を寄せ、赤竜の膚に顔を寄せると、その下でごうごうと命の鳴る音が響いていた。

初めて出会った時、己を包んだ炎と同じ音。

絶望も飢えも乾きも、全てを焼き尽くしたあの炎、全てを癒したあの涙。

絶え間ない泉のように次から次へとあふれ出す赤竜の知識と知恵で広がる世界。

そして、初めて狼に姿を変えたあのときの、血が沸き立つような自由の空気。

その全てが、それまでの辛い人生を破り捨て、新しい世界を作り出してくれた。

人間であつたらば、決して見ることでできなかった世界を与えてくれた赤竜。だからこそ、

「貴方様と出会ったとき、それまでの私は死に、新しい私が生まれました。私の世界は、もはや貴方様以外にないのです」

神子の言葉を聞いて、赤竜は身震いし、ぐいと首を持ち上げた。発する声が、感情に揺れる。

『神子よ、わしを許してくれ。わしはそなたに、わしの命を継いでほしいと願っておる』

「……命、を……？」

意味が理解できずに尾を下げる神子に、赤竜は苦笑いのような微笑を見せた。

『竜の中でも赤竜は、他の竜と異なり、子を成して血をつないでいくのではない。魔を宿したこの身は神子　すなわち、自らの分身ともいえる「器」を選ぶ。そして、いずれ天命尽きる時、その器に己の命を注ぐのだ』

「それは、つまり……」

思いがけない告白に、神子は赤竜を見上げた。

『……わしは、そなたが赤の竜となり、この森を守ってくれはしないかと、願っておるのだ。それはそなたを、永劫に人間ではないものにしてしまうにも、関わらず』

苦渋に満ちた声をもらす赤竜。目からは、しとどに涙がこぼれ落ちる。

『わしを許してくれ、神子よ。わしは己の欲のために、そなたを手放す事が出来なかった。

わしは、そなたがわしのもとを去っていく事に、耐えられなかった。わしはそなたと共に、この世の有り様を見届けたいと願い続けてしまった。

どれだけ長く生きようと、万物の長と呼ばれようと、知恵持つ者は愚かよ。これだけ生きて、まだ執着するものがあるとは、おもわなんだ』

「御主人様……」

『神子よ。もしわしがそなたを人間に戻すことが出来ると言えば、否、人間に戻らねばわしと共に死ぬ運命と知れば、あの人間達とて、喜んでそなたを連れ去っただろう。そなたも心置きなく、ここを去る事が出来ただろう。』

だが、わしには出来なかった。それを言えば、そなたがこの森を

去ってしまうだろうと思うと、出来なかったのだ。わしは狡い。そなたが信ずるほどの価値など、無いのだ」

自虐的に笑う赤竜に寄り添い、神子は目を閉じた。
強い肌こわの下でどくどくと息づく竜の炎。確かに生きていると分かるその熱さ、いずれ失われるその熱さに、涙が尽きない。

神子は竜を振り仰ぎ、青の瞳から涙をこぼしながら、微笑んだ。
「いいえ、御主人様。私は貴方様を信じます。私は貴方様の神子です。どうか私に、貴方様の御命を下さりませ」

青く染まった池の真ん中に、赤竜と白狼が、向き合っていた。

赤竜は頭を垂れて、尖った牙が二重に並ぶ口から、もはや知るものの無いまじないの言葉をつむぎだす。

木々の葉擦れを思わせる涼やかで心地の良いそれは、まるで天上の歌声のようだ。神子は歌の雨を受けて目を閉じ、幸福に尾を揺らしていた。

森の木々はざわざわと揺れ、池の周りには動物達がひっそりと集まり、彼らの儀式を見守っていた。

赤竜は歌いながら、涙をこぼす。

涙は尽きる事の無い池となり、いずれ湖となり、土にしみこみ、森に生きるものたちの糧となるだろう。

己が死した後も、この森には己の生きた証が残る。

その事に身震いするほどの歓喜と愛着を覚えて、赤竜は涙を流し続けた。

赤竜と白狼の体が光を帯び、次第に輝きを増していく。まじないによって、自分の体から神子へ命が移されていく事を感じながら、歌い終えた赤竜は首を高くあげて吼えた。

赤竜の咆哮は膚をあわ立てるほど鋭く、びりびりと空気を震わせ、

天を突き刺すように高く高く伸び、遠く離れた場所まで鳴り響き…
…長い余韻を伴って、消えた。

依頼を終えた後、男達はその森に二度と足を踏み入れなかったの
で、森がどうなったのかは知らない。

しかし風の噂に、森にはまだ赤竜が居て、時折朱に染まる空を飛
んでいる姿が見られると聞いた。

深紅の膚をまとい、守護者として森に君臨し続ける赤竜。

遠い過去に忘れ去られたフレールと言う名を持つその竜は今、そ
の頭に純白の角を生やしているのだという。

フレールの竜（後書き）

初めまして、作者の南条武都なんじょう・たけとと申します。

まずはここまで読んで下さり、ありがとうございます。楽しんでいただけたでしょうか？

読んで下さったあなたの心に、何か響くものがあつたのなら、作者として嬉しく思います。

この作品は「正統派ファンタジーの竜が書きたい」というところから始まりました。

竜といえばファンタジーの王道、様々な作品で様々な姿の竜が出てきますが、その造形はあまりにも多岐にわたり、意外性を狙って突飛な設定になつたものも少なくありません。

そういった竜の姿も魅力的ではありますが、そういえば古式ゆかしいファンタジーの竜、というのは最近あまり見ないかも……うーん見てみたいな、という自分の欲求から、赤竜が生まれてきました。

その願いから、出来るだけ赤竜の存在感を文で描き出せるように努力したつもりです。

また、人間（男達）には決して踏み入れる事が出来ない、神子と竜の異種族同士の絆も描きたいテーマの一つでした。

神聖で超自然的な存在だからこそ、人間はむやみに干渉出来ない、またしてはいけない。そういった暗黙の了解で、この物語はこういつた終わり方をしています。

少し大きな話になりますが、現実で自然と人間が共生するのも、互いを尊重しあう、そういった心遣いが必要なのではないかな、という思いを込めているつもりです。

長々とした後書きになってしまいました。読んで下さって本当に

フレールの竜

ありがとうございました。

続いて番外編で「竜、在りて思う」という赤竜視点のお話も投稿しましたので、そちらも読んで頂ければと思います。

竜、在りて思う

「悪魔め！」

底知れない憎悪に駆り立てられ、人間は叫ぶ。

「魔女！ 魔女！ 魔女！」

恐怖に打ち砕かれた心は、生贄を求めて娘を捕らえる。

「お前があのようなものを持ってこなければ、息子は死なずに済んだのだ！」

悲哀から発した怒りは、石のつぶてに形を成して、罪のない娘の体を打つ。

石は雨あられとなって娘の上に降り注ぎ、その体からとめどなく血を噴き出させる。

薄い肌と細い骨で出来た体に、その雨は耐え難い痛みであったであるうに、娘はただひたすらに雨が通り過ぎるのを待ち、怒りに燃える人間達の中で身をちぢこませるだけだ。

何ゆえ？

赤竜は問いかけた。

何ゆえ、悲しみを抑え、怒りを持たず、痛みを耐える？

赤竜の憤怒を恐れて逃げる人間達に見捨てられた娘は、額から血を流し、息も絶え絶えになりながら、笑んだ。

「愛する者に手をあげる事など、出来ませぬ」

その頃、世界は多くの生物をその揺り籠に産み落とし、未熟で幼い命たちは、竜が支配する世界におずおずと足を踏み入れ始めたばかりだった。

当時、竜は生物の長として、彼らを時に守り、時に滅ぼし、世界の調和を保っていた。

その頃、赤竜はまだ若かった。この世にある全てを知りたいと願い、知るために近づき、己が炎のためにそれを滅ぼしてしまっても、

気づきもしないほど若かった。

年を経た竜達は彼を諫めた。

『我らは、この世に生きる全てのものよりなお、力を持っている。それ故に、彼らのために心を砕き、慈しみ、守らねばならぬ。無闇にその命に触れてはならぬのだ』

だが、赤竜は竜達の諫言を聞かなかった。

それは、己の力が他のものにどのような影響を及ぼすのかわからなかった、無知故の傲慢であり、また、己を突き動かす知識欲を抑える術を知らなかった故でもあった。

赤竜は、地を歩く人間を見る事が、ことのほか楽しみだった。

他の獣や植物達と違い、はじめ四つ足で歩いていた人間は、ほんの瞬きの間に後ろの足で歩き、前足で物をつかむ事を覚え、道具を作り、獣を狩り、言葉を作り出し（それは竜が使っていた言葉の一部を用いた、ごく稚拙なものではあったけれど）、やがて群れを成して、巣を作る事を覚えた。

これまで見てきた中で、人間はもっとも早い進化を遂げ、更なる未来を自らの手で作り出そうとしている。その多様な有様に、赤竜は心を奪われた。

少しの間に多くの変化を見せるものだから、目をそらす間もなく、熱心に彼らを見守り続け、やがてそれに飽いた。ただ見ているだけでは、人間を知る事は出来ない。直接言葉を交わさなければ、人間を知る事は出来ない。

そして赤竜は、年長の竜がとめるのも聞かず、人間のもとへと飛び立ったのだった。

村と呼ばれるその群れを選んだのは、ほんの偶然だった。

赤竜が好む森の中に位置し、ごく小さな集まりだったので、人間が群れの中でどのような行動を取るか、観察するのに手ごろだと考えたからだった。赤竜はしばらく観察を続けた後、これぞという人間を見つけて、それに接するつもりだった。

魔法を用いて己の姿を見えないようにすると、赤竜は木の上に座つて、すでに慣れ親しんだ人間の観察を始めた。

その村は、本当に小さな村だった。

人間の作つた巢は、せいぜい五十か六十ほどしかなく、それぞれの巢に二、三匹。竜も少ない数で群れを作るが、人間のように脆弱な生き物であれば、森の中でこれほどの規模の群れでは危険なほど小さいだろう。

実際、人間の一生は、赤竜が見知っていたよりも尚、短かった。

寿命が尽きるのも早ければ、ほんの少しのことで簡単に命を失ってしまう。赤竜が見ている間も、人間達は病で死に、獣に襲われて死に、森で迷つて死に、崖から落ちて死んだ。

それを補うように、人間は信じがたいほどの早さで子を産み落とし、赤竜はそのあまりの脆弱さに目を見張り、次々と死んでいく人間達を、物珍しさもあつてつぶさに見つめ続けた。

そして赤竜は、あの少女を見出す。

その日、赤竜は明け方頃、燃える炎の匂いを嗅ぎ取った。

眷属の匂いに思わず顔を向けると、炎は村の巢の一つを包み込み、闇の幕を一刻も早く引こうとするように、天を舐めていた。火に気づいた人間達は、悲鳴を上げながら水や砂をかけていたが、炎はもはや手のつけようもないほど、猛り狂っている。

赤竜は、もしやそれが己の存在ゆえか、と考えを巡らせた。

赤竜が存在していることで、火は主の訪れを喜び、ほんの小火ほやでも、空を焦がすほどの大火になる事があるのだ。

しかし赤竜は、その事を大して気にならなかった。火がおさまり、嘆きの呻きをあげて焼け跡をうろつく人間達を、好奇心で見つめる。（あの巢には、親子三匹の人間が居たはずだ）

またしても、これほど些細な事で、人間は死んでしまうのか。そう思ったがしかし、次の瞬間、黒焦げの柱の下から、人間が一人、引きずり出されて、歓声が上がった。赤竜は意外な事に驚き、更に

注視する。

焼け跡から助けられたのは、その巣に居た人間の中で最も幼い子だった。

火に髪を焦がされ、痩せた手足は火傷や炭で汚れ、顔は血の気を失っている。毛布に包み込まれてよるよる歩き出した足取りは頼りなく、何を話しかけられても答えようとしない。

しかし、数ある巣のうちの一つに招かれ、幾日か休んだ後、その人間は驚くほど明るい顔で、他の人間達と言葉を交し合った。

赤竜は驚いた。

竜は同族を失ったとき、その涙が枯れるほど泣き続け、やがてそのまま死んでしまうこともあるほど、情の厚い生き物だ。いくら人間が、簡単に死に、また簡単に生まれるとはいっても、これほど短い期間で、肉親の死を忘れてしまうことなど、あるのだろうか。

赤竜はこれまで以上の注意を持って、その人間を観察した。

すると、その人間が、他の人間がいる前では明るく振舞ってはいるけれど、一匹だけの時は、常に泣いている事に気がついた。

赤竜は不思議だった。

何ゆえ、あの人間は隠れて泣くのだろう。肉親を失った悲しみを、隠す必要などないだろうに。

観察を続けてしばし考えた後、赤竜はそれらしい答えを得た。

あの人間は、他の人間に心配をかけまいとしているのではなからうか。いつまでも沈んだ顔をしていたら、他の人間がいつまでもあの人間を慰めなければならぬだろう。

あの人間は、それを嫌がって、他の人間の前では微笑み、しかしたった一匹でいる時は、魂が砕けそうなほど、涙を流すのではなからうか。

赤竜のこの推測は、当たっているようだった。

その人間は、他の人間が何かで困っていると、率先して手伝い、彼らのために己の身を砕いた。他の人間が嫌がることでも、進んで行っから、その人間は他の人間に頼られ、可愛がられるようになった。

た。

赤竜は興味深く、その人間……どうやら雌らしい……を観察し始めた。

竜の群れにおいて、親を失った子竜は、他の竜によって育てられるが、あの人間のように、他の竜に対して、こびへつらうような真似はしない。

竜はただただ、己の種族を絶やさぬよう、子竜を育てる事を義務としているだけで、竜と子竜の間には何の打算も見返りも存在しない。

それは、人間の場合には当てはまらないようだ、という事実は、赤竜を驚かせた。

その人間が、手が離せないから、と他の人間の用事を断った時、断られた人間は不快の空気を漂わせ、育てられた恩も忘れた親なし子、と陰口を叩くのだ。

その声が聞こえぬわけでもなかるうちに、その人間は明るい表情を消すことなく、他の人間達のために働き続けた。

ある時、雨が一滴も降らない日々が続いた。

赤竜は炎の化身ではあるため、多少水を欠いたところで、何の不都合もなかったが、人間や他の動植物にとっては、悪夢のような時だったであろう。

日照りは一年、二年、三年と続き、赤竜の見守る中、数え切れなほどの生き物が、渴きを訴えながら地に没していった。

それは赤竜が見守る村でも同じで、人間は以前にも増して次々と死んでいき、三年目となったその年には、数を半分以下に減らしていた。

人間達はあえぎ、呻き、天に手を伸ばし、雨が降る事を一心に願った。

しかしその願いが聞き届けられる事はなく、いよいよ絶望に瀕したその時、あの人間の娘が、水がある場所を見出してくると宣言し

た。

村の人間達は、あるいは親切心から、娘に旅の危険を説き、あるいは懐疑心から、娘の旅の無謀さをあざけたが、娘の心は変わらなかった。娘は、自分には残していく家族も、財産も無いから、旅に出るにはちょうど良いと言った。

そして、制止の手を振り払うようにして、村を旅立ったのだった。

赤竜は娘の後を追った。

人間の、しかも雄よりも更に弱い雌が、あてどもなく水の探索に出かけるなど、村人の言葉を引き合いに出すまでもなく、自殺行為だ。乾きに狂った獣のような娘の行動は、赤竜に気遣いの心を抱かせた。

華奢な足で、遅々とした、そして的の外れた歩みを進める娘が、やがてとうとう地面に倒れて動かなくなった時、赤竜はその儂い命を哀れに思っ、娘の前に降り立ち、その手で娘に触れた。

途端、赤竜がその身に宿した炎が、娘の体をあつという間に覆った。

娘は悲鳴を上げなかった。全身を焼かれ、のたうち回る力さえ無くした娘の命が尽きていく様さまに動転した赤竜は、迷う間もなく、万能の薬と重宝される竜の涙を娘の上に降り注いだ。

すると、赤竜の炎は瞬時に消え、娘の体は傷一つ無く蘇った。息を吹き返した娘が赤竜を見つめたとき、その体からは、青い瞳を除いて一切の色彩が抜け、白に染め抜かれていた。

娘は目の前に現れた赤竜の威容に畏怖と感謝を抱き、歓喜の声をあげたが、赤竜は己の胸を貫く衝撃にうな垂れた。

赤竜が不用意に触れたため、娘は危うく命を落としかけ、救われて、しかしもう人間ではない生き物になってしまった。

人間が竜の炎と涙を直接その身に受けて命を永らえるという事は、その命が輪廻の枠組みから外れてしまう事を意味していた。

それは、身が滅んだ後、永ながの闇と呼ばれる世界に繋がれ、全てが

滅ぶその時まで永劫に、生きる事も死ぬ事も出来ない未来が待ち受けているという事を、意味していたのだ。

赤竜はその時ようやく、他の生き物に干渉してはならない、と竜の長が説いた言葉の意味を理解した。

何という事をしてしまったのだろう。

己の成した事への恐怖に打ち砕かれた赤竜は、己を一心に見つめる純粋な娘の瞳に訴えられるまま、涙を与えた。

娘がそれを村に持ち帰って地面にこぼすと、涙は瞬く間に湖となり、乾きに飢えた人々を十分すぎるほど癒した。それは、しかし新たなる悲劇の幕開けに過ぎなかったのである。

水を持ち帰った娘は、村人に大変感謝されたが、同時に人ならぬその外見を恐れられるようになった。

その頃の人間はすでに、竜は架空の生き物と思い込んでいたから、話を聞いた村人達の中には、娘を嘘つき呼ばわりする者もいた。

娘のその姿を見た赤竜は、迷った。

娘を己の炎で焼いたあの時、赤竜は娘のもとを離れ、二度と人間にかかわらないつもりだった。それが万物の長たる竜の務めであると、考えたために。

しかし、己のために孤立する娘の姿は、胸をかきむしりたくなるような罪悪感を抱かせた。

赤竜は、己の存在のために猛り狂う炎をそのままにしたが故に、娘の親たる人間を殺したのかもしれない、と考え始めていた。そして、親を失いながら健気に生きる娘を、今度はこの手で殺しそうになったのだ。

己が故に、異形にさせられてしまった娘は、もはや異形たる己が受け止めるしかないのではないか。

赤竜は他の人間に見つからないように娘を誘い出し、共に森で時間を過ごすようになった。

驚いたことに、娘は赤竜を喜んで出迎えた。

己を異形とし、あれほど尽くしてきた村人達に恐れられるようになったその原因たる赤竜を、娘は嫌悪するどころか、最上の敬意をもって接した。

赤竜は娘の心に、負の感情がほんの一時もとどまらない事に驚嘆した。

時に、娘はその心に深い悲しみを抱き、涙することがある。周囲の理不尽な振る舞いに怒りを覚え、己の潔癖をその瞳で訴えることもある。

だが、そういった負の心は瞬く間に過ぎ去り、娘はこれ以上の幸福は無いという表情で微笑み、己を慈しみ育ててくれた村人達に、己の命を救った赤竜に、深い愛情を示すのだ。

赤竜は、娘の鷹揚さに、人間とは斯くも寛容に、斯くも深い愛情を抱けるものなのかと驚嘆した。娘は、その純白の姿と同じ、穢れの無い魂を持っていた。

赤竜はしだいに娘に愛着を持ち、様々な知識を授けていった。

はじめは文字を書く事も読む事もままならなかった娘はしかし、驚くべき早さで知識を吸収した。その内容は文字の読み書きから、歴史、数学、医学、はては魔術にまで及び、娘は己の体を動物に変え、赤竜とともに森を駆ける楽しみを見出すようになった。

特に気に入った姿は狼で、赤竜が連れて行った草原で、いつ飽きることもなく、二匹で走り続けたものだった。

娘と過ごすときは、光が踊る湖のように、陽を背負って輝く山のように、心躍る楽しい時間だった。

しかし、平和な時は長くは続かなかった。

早魃かんばつによって水を奪われた他の村の人間達が、尽きることのない湖を求めて、娘の村に戦いを挑んできたのだ。

人間達は鍬を鋤を振り回し、木の枝を尖らせた槍を投げ、道端の石で敵の頭を砕き、争った。

その争いはやがて大陸全土に広がり、竜が人間を見限るあの愚かな大戦へと繋がっていくのだが、その時の赤竜はただただ、娘の身

を案じていた。

危険だからと森への避難をいくら勧めても、頑として首を縦に振らなかつた娘は、赤竜から習った知識を使って、傷つき倒れた人間達のために働き続けた。

命を救われたものは、娘を神の遣いと崇めたが、やがて娘の力だけでは救えないほど多くの犠牲が出るようになり、人間達は嘆きと怨嗟の声で空を埋めるようになった。

そして、村の長の息子が看護の甲斐なく死んだとき、長は怒りと悲しみで娘を指差し、言った。

「悪魔め！ 貴様が悪魔の術を用いたから、息子は死んだのだ！」

その言葉が、村人達の心に鬱積した怒りを爆発させた。これまで多くの命を救ってきたにもかかわらず、人間達は娘を恐れるがゆえに、また、いつ果てることなく続く戦いに疲弊したが故に、娘を責め、ののしり、傷つけた。

「お前はいつまでも年をとらぬ」

「竜などという邪悪な生き物の加護を得たためだ」

「あのような忌まわしい水が無ければ、こんな争いは起きなかつた」

「お前のせいだ！ 死ね！ 死んでしまえ！」

その、あまりにも傲慢な非難に、赤竜は憤怒で炎を猛らせた。

なんとという傲慢！

なんとという忘恩！

命を救われたときには涙を流して娘に感謝したというのに、何ゆえ、娘を責めるのだ？

争いの原因は娘が涙を持ち帰ったからではなく、人間が浅ましい欲望に負け、同族で殺し合いを始めたからではないか！

赤竜は怒りのあまり空一面を焼きながら、娘のもとへ向かった。

赤竜がついた時、娘に暴力を振るっていた人間達が一瞬にして、灰さえ残さず燃え尽き、噓し立てていたもの達は悲鳴をあげて逃げていった。

赤竜はそれら全てを、炎と牙で食い尽くしてやろうと思ったが、

娘がそれを止めた。純白の体を血と泥に汚し、弱々しく地面に横たわった娘は、それでも微笑を見せて、

「おやめ下さい、赤竜さま。彼らの命を、奪うことは」
そう囁く。赤竜は理不尽な頼みに、初めて娘に声を荒げた。

『何故だ、娘よ。あの者達はお前から被った恩恵を忘れ、お前を貶めたのだ。その穢れた魂は全て、焼き尽くさねばならぬ』

赤竜の激しい怒りに娘はたじろぎ、しかしそれでも首を振る。

「愛する者に手をあげる事など、出来ませぬ。どうしても許せぬのであらば、どうか私の命をお奪い下さい。彼らが恐れるのは、この私なのですから」

赤竜は神子の微笑みに言葉を失った。

ここに居れば、赤竜は村人の命を奪わずにはいられない。その赤竜の前に、娘は何の躊躇いもなく、ただ村人を救う為だけに身を投げ出すだろう。

しかし、己が再び娘の命を奪うことなど、到底耐えられることではなかった。

何故娘が、そこまで人間達を思うのか、赤竜には分からなかった。しかし一つだけ、理解したことがある。それはもはや、この地で娘を生かしておくことは出来ない、という事だった。

『お前の命を奪う事など、出来ようものか』

赤竜は娘の心に打ち負かされて涙を流しながら、傷を癒した娘をそつと持ち上げ、飛び立った。

娘を連れ帰った赤竜に、竜の長は非難を浴びせることはなかった。じつと赤竜を見つめて一言、

『なればその人間を、己の神子とするが良い』

それだけ告げて、赤竜を群れから永久に追放した。神子を選んだ赤竜は、竜の群れから離れ、神子と共に生きねばならない運命であったからだ。

今、赤竜は思う。

もしあの時、赤竜が娘を助けなければ、娘は苦しまずに済んだの

ではないかと。さすれば、娘は死した後、永の闇に囚われる事なく、再びその命を得る事が出来たのだ、と。

すでに人間ではなくなった娘を、輪廻の輪に戻す方法を知らない赤竜ではなかったが、二つある方法はそのどちらも、赤竜に躊躇いを抱かせた。

どちらを選べば、娘の為になるか、赤竜は分かっていた。

けれども己の心は決して、その答えを認めようとしなかったのである。

竜、在りて思う（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます！
作者の南条と申します。

本編では赤竜を掘り下げて書く事が出来なかったので、番外編として制作しました。

神秘的で聖なる生き物に見える赤竜にも、過ちを犯して後悔するよ
うな過去があり、

その過去ゆえに今の神子との信頼関係がある……というような繋が
りを持たせて
います。

機会があれば、この番外編と同時期の神子のお話なども書いてみた
いと思います。

もしよろしければ、感想など頂けると嬉しいです。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0958d/>

フレールの竜

2008年8月29日17時14分発行